

林忠良氏の逝去を悼む

片柳 榮 一

【林忠良氏略年譜】

- 一九三八年 兵庫県生まれ
- 一九六一年 京都大学文学部哲学科基督教学卒業
- 一九六六年 京都大学大学院文学研究科博士課程（基督教学）修了
- 一九六七年 関西学院大学経済学部専任講師（宗教主事）
就任
- 一九九八年 関西学院大学経済学部教授（宗教主事）退任
関西学院大学名誉教授
- 二〇二〇年 六月二十九日 逝去
- 著書 『生かされつつへ生きる』——よく生きる知恵：断章98——（関西学院大学出版局、二〇一三年）
- 論文 「キルケゴールにおける死の問題——序説」『死の意味』（新教出版社、一九九四年）所収
- 「キルケゴールにおける〈論理的問題〉」（『基督教学

林忠良氏の逝去を悼む（片柳）

研究』第十四号所収）

「キルケゴールにおける」Continuum《の問題》（『基督教学研究』第二十三号所収）

共編 『いま経済学を学ぶ——経済と人間』（日本経済評論社、一九九二年）

林忠良氏は筆者にとつて基督教学の先輩であるが、先ず地塩寮（京都大学基督教青年会）の先輩としていろいろお世話になった。基督教学を専攻するようになったのも、寮の先輩としての林忠良氏のお薦めによるところ大である。京大Y（地塩寮）の修養会が琵琶湖畔で開かれ、波が静かに打ちつける夜中に進路についてアドバイスしていただいたことを懐かしく思い出す。林氏は恩師武藤一雄先生の下でキルケゴールを学ばれ、先生の思想の深みを最もよく熟知されていた人だと思ふ。そして武藤先生の代表的論文「キリスト教と無の思想」を畏友レップ氏と共にドイツ語に翻訳されたのである。

一九七六年私はドイツ留学を終えて、林氏が同じく勤務する関西学院大学に就職するのを許され、林氏のところへ挨拶に伺った。開口一番林氏が言われたのは、職についている自分の場が分かるまでは、何も言うな、沈黙している、

教授会で発言などしたら絶対にあかん、という厳しい忠告であった。それが極めて賢明な忠告であったことは、次第に身に滲みてわかってきた。そうしたことにも繊細に気を配ることのできる本当に、鋭く賢い人であった。林氏が何気なく語る会話の到る所に、氏の思索の深い所から生まれ出た洞察が顔を覗かせていた。そして学生に接する時の優しくユーモアを湛えた誠実な態度には、氏がキルケゴールに親しむ中で学び、自分のものにした「真摯さ」が滲み出ていた。

一九七八年に基督教学教室は研究雑誌『基督教学研究』を発刊することができるようになり、今もこのように続いているが、これも偏に林氏のおかげである。若い学徒の研究発表の機会を創り出そうと、林氏が中心になって、多くの先輩諸氏の協力を求めて走り回り、ようやく発刊にこぎつけたのだ。当時こうした研究雑誌をもっていた教室は京大文学部では少なかった。多くの教室が競うように出すようになったのは、私たちの雑誌が出回るようになった後からであり、それに倣ったからだ。私は密かに思っている。林氏はアイデアも豊富で、この研究雑誌の欧文版をぜひ出したいと様々なプランを立てておられた。それが果たせないでいるのは心残りである。

関西学院大学を定年前に退任され、念願の信州八ヶ岳の麓へ隠棲された。早くに愛する奥様を亡くされ、お二人の娘さんを男手一つで立派にお育てになられた後、信州の高原で、独り万感の思いで過ごされた晩年であったと思う。